

# 第1回 研究会より

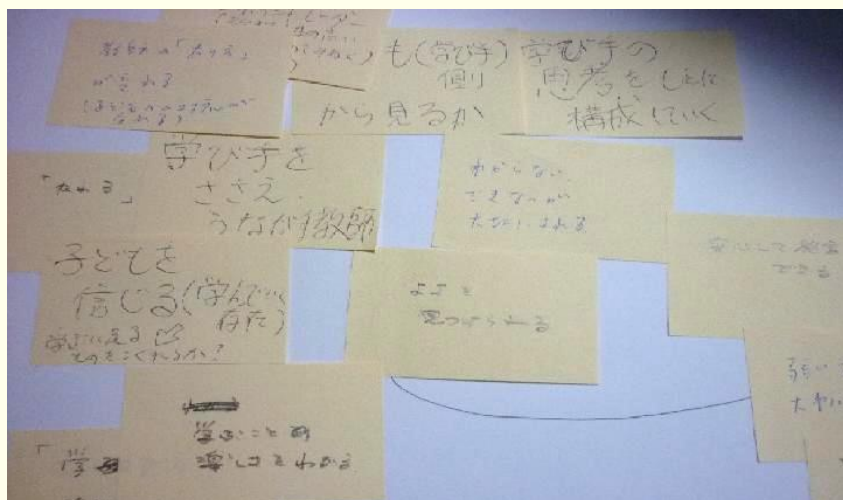
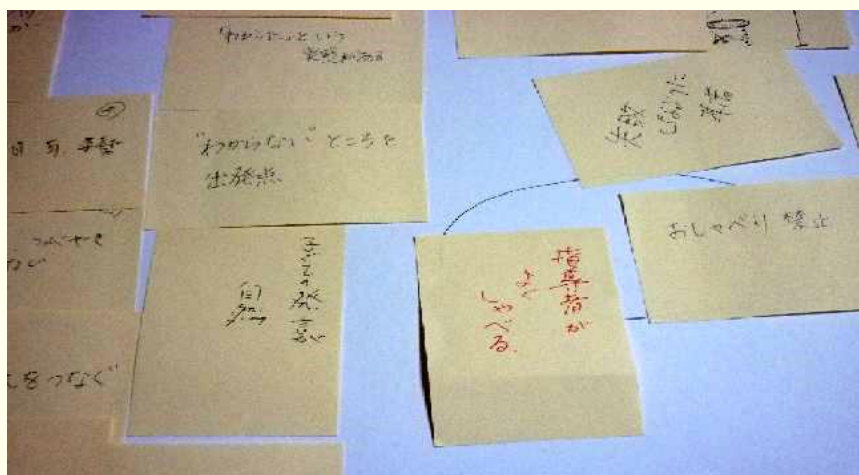
参加者 13人

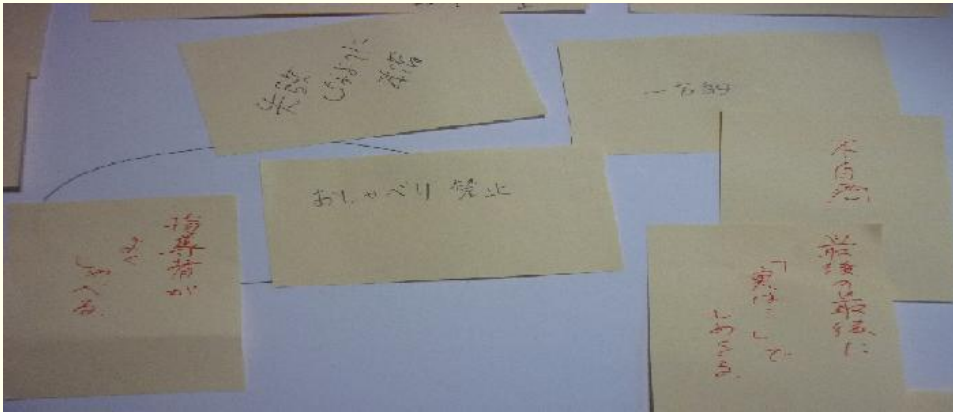
## 1 ワークショップ

自己紹介の後、ワークショップを行った。

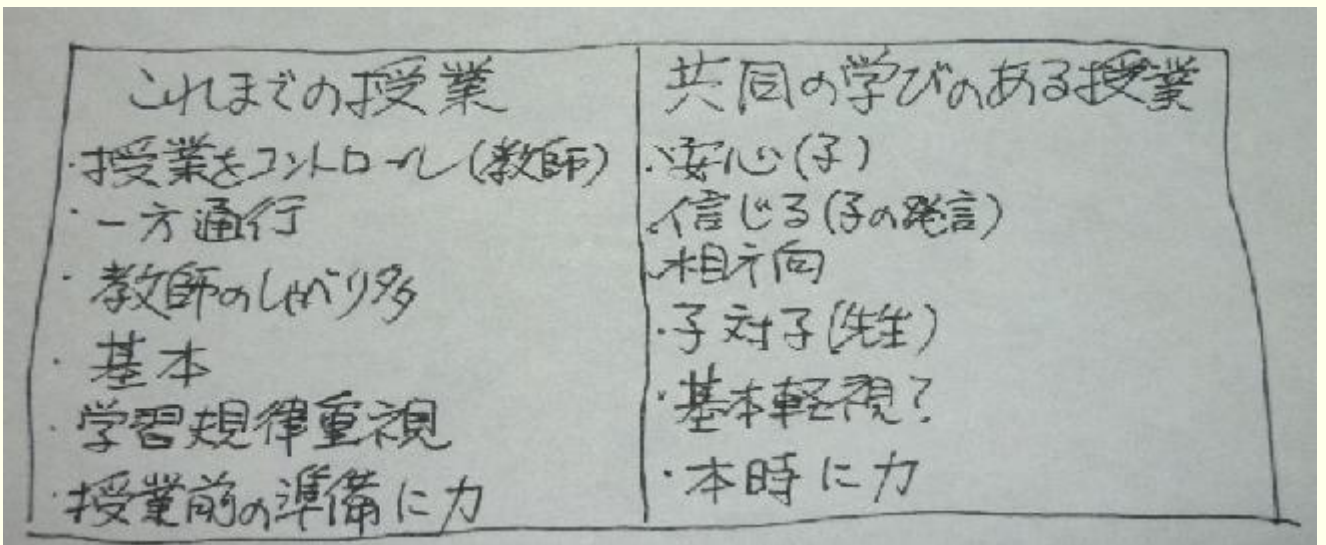
テーマ：『これまでの授業と共同の学びのある授業はどこが違うか？』

4つのグループにわかれ、テーマに沿って、15分程度、思いついたことを理由を述べながら書き出していく。

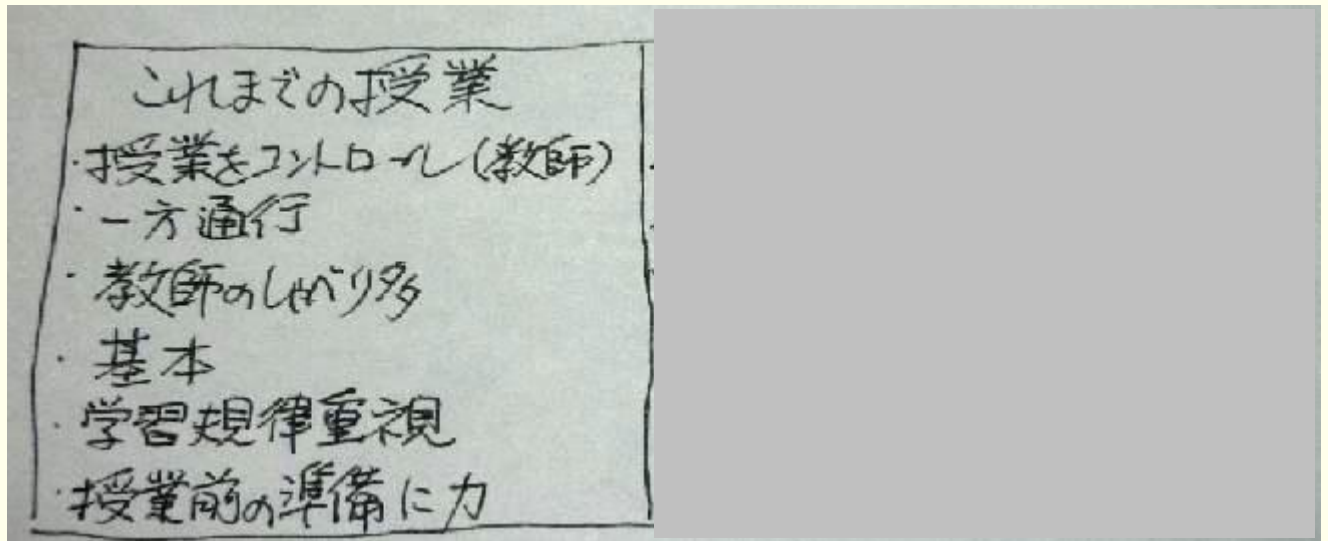




その後、全員で討議していった。おもいおもいを感じたことを語っていったのをホワイトページにまとめていった。



次に、「共同の学びのある授業」を消して、「これまでの授業」を使って、共同の学びができないか、再びグループディスカッションを行った。この手法はスタンフォード大学の起業家の講座でも取り入れられているものである。要するに、これまで自分にとって、マイナスと思っていたものを、使って考えることで新しいものが見えてこないかということである。



参加者の発言を拾ってみる

A:「教師がコントロールする授業といっても、これは当然で共同の学びのある授業でも当然行っている。教師の立ち位置や重心のかけ方の問題で、これまでの授業と共同の学びの授業は対立関係にないのではないか。」

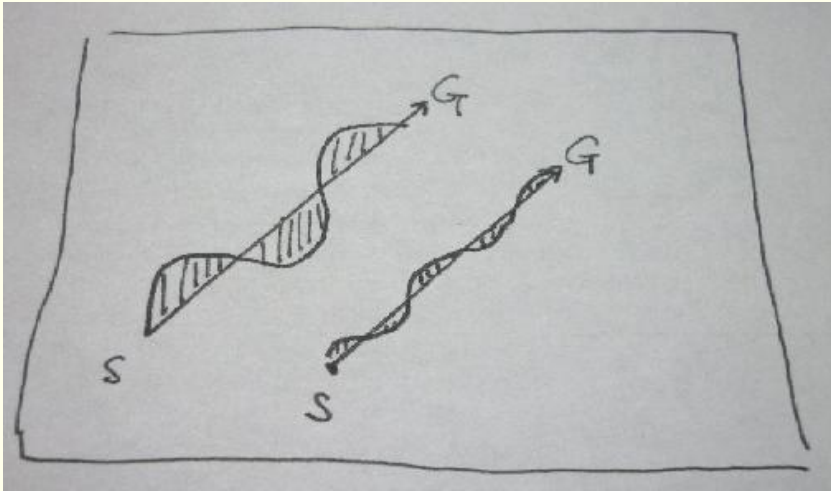
B:「自分は数学担当だが、数学や算数でも、九九なら九九の型（基本）を作ることがとっても大切だ。共同の学びでも基本がなければ応用はない。」

C:「型を作ったままではなく、それを壊す“型破り”をさせることで、本当の型のよさを気づかせることができる。」

D:「授業前の授業前の準備に力を注ぐのは、共同の学びでも同じ。むしろ、こっちの方が準備が大切。いわゆる分母を増やすイメージ。教師は子どもが発言するであろう予想の分母を増やして授業に望まないと、あらゆる対応ができない。」

E:「不時着の授業というか、思ったとおりの方向に向かわなかったとしても、それが不時着であったとしても、授業としては成立するような、そのための準備。」

ここで、Fさんが、山形大学江間教授から教えてもらった話ということで、ホワイトボードに図を描いて説明してくれた。



「授業はS（スタート）とG（ゴール）がある。ゴールは、教育的価値がありスタートより高い位置に設定しているはず。問題なのは、ゴールまで登っていく際に、生徒はゆれながらゴールに向かっていくのが授業。このゆれの振れを大きくしていこうというのが“共同の学び” ゆれ幅が狭いのは従来の授業という考えだろう。そこに教師の発話の量の多さが関係してきたり、思ってもいない子の発言を敢えていかしたり、そのような展開が意識的にでてくる。

一通り、参加者からの発言を出してもらった上で、司会が感想を言った。

司会「今回の議論でわかったのは、“これまでの授業”と“共同の学びのある授業”は決して対立して存在しているというのではないということです。よく共同の学びのことを話すと、『これまでの授業とどこが違うのか』とか、『自分は従来のやり方でいいんだ』なんて言われることがあるのですが、私たちこの研究会の会員は、共同の学びのある授業とは、これまでの授業を否定して新しいものを作ろうというのではなく、これまでの意識の持っていく方を少しホワイトボードの右側の方にシフトしてみようということなんだと共通理解していきましょう。」

## 2 ビデオカンファレンス 小学5年 社会科

この授業の面白さについて

- ・ 児童の司会で、教師がほとんど黒板にまとめ役に徹しているのはすごい挑戦。
- ・ むしろ、児童司会で授業がここまでの高まりを見せることに驚いた。
- ・ 児童の発問がやや単調で、停滞している部分も見られるが、発言内容を聞くと、最初の工業製品の生産から安心・安全へ変わっていくなど、変容していることに気づく。

- ・ 停滞したということよりも、もう出し切ったという感じ。その出し切ったという雰囲気になったときは、やはり教師の出だろう。
- ・ 教師が途中数箇所で紹介しているが、あの気持ちよくわかる。自分も、このままこの議論に任せてよいのかどうか、常に迷いながら授業をしているから。
- ・ 黒板の板書も挑戦的。これまでのような黒板で類型化するような板書ではなく。発言した順序で板書している。いわゆる、授業の履歴という感じだ。
- ・ せっかくの板書も、あまり児童には有効に働いていないようにもみえた。
- ・ 子どもの発話の量が驚く。ほとんどが、ノートや教科書を見ずに話している。ライブで考えて発言している証拠だろう。

今回は、本研究会の開会やワークショップを取り入れたため、時間が大幅にオーバーしてしまった。次回からはビデオカンファレンスは、グループで話あったり、もう少し、話し合いの重点を図っていききたい。それにしても、午後2時からおよそ6時までの長丁場だったが、参加者の意識が高く、あつという間であった。本当に感謝したい。この後の懇親会でも、久しぶりに授業の話をたっぷりした飲み会となった。

会員の中でもベテランのNさんからは、「高橋先生ちょっとがんばりすぎ。みんなあなたの気持ちわかっているから」と肩をたたかれた。本当にありがたい一言。1回目はなんとかうまくさせないといけない、参加者には「来てよかった」と思ってもらいたいと思って臨んだので少々力が入りすぎだったことは否めない。参加会員の方々が、もっとおおらかな気持ちで参加なさってくれるように今後とも、会の運営を考えていきたい。女性教師のKさんに「1回目の感想は？」とたずねたら、「とっても楽しかったです。それと同時にまだまだもやっとしているところもあります。」という返答だった。きっと、この会は、研究会に来てすっかりして帰るような研究会にはならないと思う。むしろ、“もやっとしたものを持ち寄って、新しいもやっとなを持ち帰ることになるのかもしれない”ただ、日常もやっとした悩みの中でのもの同士があつまり、その悩みを共有することが、あまりにも今まで教育界にはなかったように思う。機会があっても、学校の枠、小中の枠、教科の枠、経験年数の枠、出身地の枠、それらを超えて本音で共有する場はなかった。

この研究会は、そんな場所になればいいと感じた1回目であった。



[戻る](#)